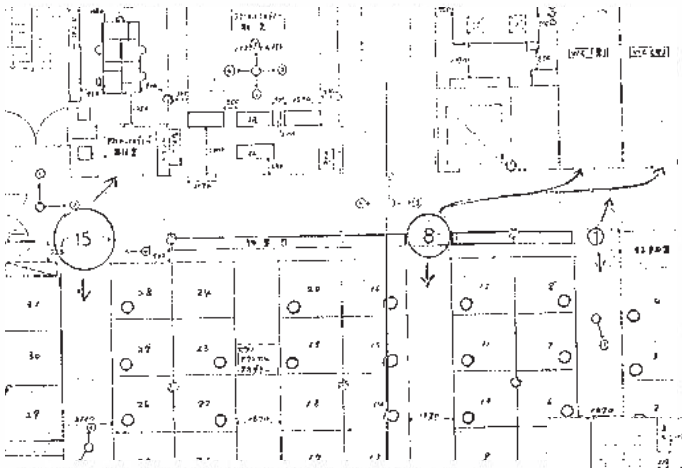
ヤマハ（旧 日本楽器製造）　防災面からの設備計画　　避難経路　耐震設備

行動の観察

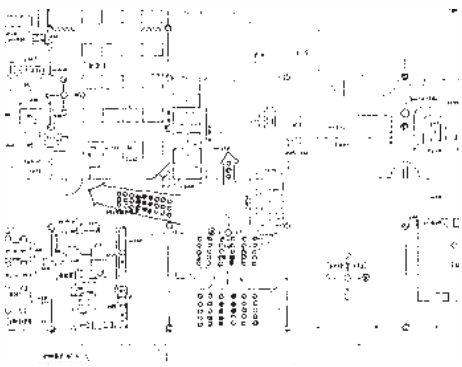
非常時において、日常の活動から習慣的に身につけられた情報をこえて的確な行動をとることは難しい。既存の建物にたいしてあらたに避難経路を計画するにあたって、そこで働く人々の日常の行動を詳細に観察することによって、緊急時にもあわてることなく円滑に、的確な経路を通って、安全な場所へと避難するための経路を設計することが可能になる。

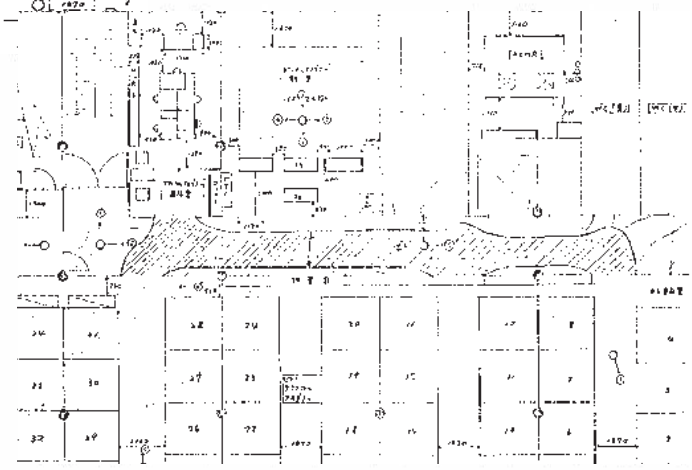
同じ場所へ出入りできる３つの経路。各経路の使用頻度は調査の結果「１５：８：１」となった。
人の流れと量は習慣と、必要性、生理的な要求によって決められる。
もっとも利用頻度の高かったのは食堂とタイムレコーダーへの通路だった。どちらも生活をささえるために欠くことのできない最低限必要なものである。



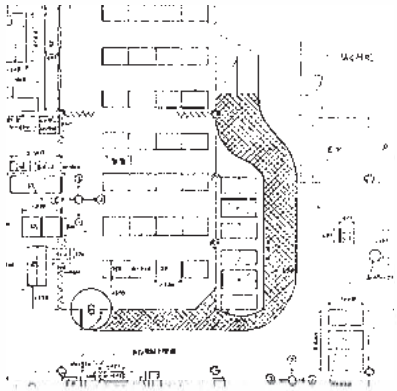
同じ場所へ出入りする各経路の使用頻度は「15：8：1」だった

人間は無意識のうちに集団として同じ意識を共有し、同じ行動をとることがある。実務的な必要性や、空間のレイアウトによる通り易さなど、現実的な要素だけではなく心理的な要素を考えることは避難経路の計画にはとくに重要である。





既存の建物にたいして避難経路を計画するためには設備を知るだけでは不十分である。そこで働く人々の日常の行動を観察することによって、緊急時にもあわてることなく円滑に、的確に安全な場所へと避難するための経路を設計することが可能になる。



廊下の普段利用されている部分。廊下の幅に合わせて人間の行動範囲が決定される。廊下の幅が現在ある幅に決定された根拠はどこにあるのだろうか。あらゆる既成の規格をその成り立ちから見直すことで解決策が見えてくる。

引用：建築ジャーナル　2000-7